住民参画促進計画

京都大学大学院　玉井瑛子・高橋利之・中条匡臣・畠中達亮・八尾修司

提案のねらい　”再び人と水が寄り添うまちに”

文化的景観。大地に刻られた人間のいのちのかたち。
水路が生活に欠かせなかった時代、人と水は常に寄り添い、離れることはなかった。
人が自由に綺麗な水を飲める時代、水路は汚れ、人と水に距離が生まれた。
人が自由に移動できる時代、水路は狭められ、埋められ、人と水の距離が拡がった。
社会の変化、生活の変化に伴い人々の風景から水が薄れていった。
少子高齢化、人がまちから離れる時代
生活が伴わない文化的景観が愛でられる時代
再び人の営みと風景を結えることの必要性をいま問いたい。

SITE RESEARCH

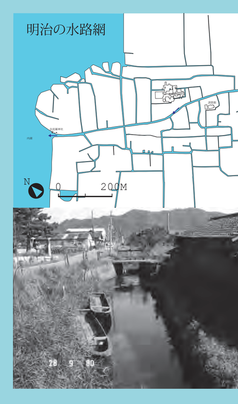
対象地概要

滋賀県東近江市伊庭町は琵琶湖の内湖沿岸に位置し、町中を水路が縦横に巡る水郷集落である。昔は農業や家事など生業の中心を担っていた水路であるが、今日その利用は減少し、本来人々の生活と共に在り人々の活動が現れるはずの『文化的な』水郷風景は、単なる過去と水の清澄さを感じるのみの水路景観と化している。

一部の住民は自治組織を結成し、伊庭の歴史や水路を守るために活動を行っている。また近年では東近江市が重要文化的景観の選定を目指して調査を進めており、住民・行政・大学の協働による地域づくりが目指されている。

水路網の変遷

明治の水路網では伊庭川から枝分かれした水路が集落の細部まで水を運んでいたと考えられ、水路沿いに設置されたカワトと呼ばれる石積の階段で飲み水を汲む人や炊事、洗濯をする人、水遊びをする子どもの風景が溢れていた。しかし、上下水道の整備や自動車の普及といった社会構造、ライフスタイルの変化に伴い、次第に水路が埋められ、狭められてしまった。現在残っている水路は比較的大きな水路であり、細い水路や袋小路型の水路が埋められたと考えられる。（右上図）



水利用の変遷

・上水→交通路→農業用水→排水路の順に水路網の役割が減少
・昭和30年代に田舟が使われなくなり水路が埋められ始めた（右表）

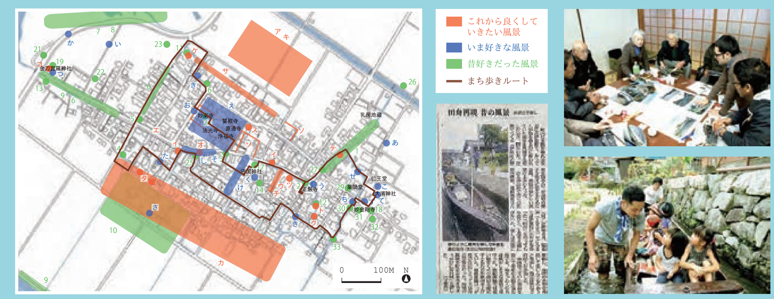
機能		昭和20年以前	昭和20年代	昭和30年代	昭和40年代	昭和50年代	昭和60年代	平成以後
生活用水	飯用	○	○	○	×	×	×	×
	炊事用	◎	○	○	×	×	×	×
	風呂用	◎	◎	◎	○	×	×	×
	洗濯物のすすぎ	◎	◎	◎	◎	◎	×	×
	雑用	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
農業用水		◎	◎	◎	◎	◎	×	×
交通路	田舟（農家）	◎	◎	◎	○	○	×	×
	田舟（漁師）	◎	◎	○	×	×	×	×
地域アイデンティティ		×	×	×	×	○	○	◎

凡例　◎明確に確認できた　○一部確認できた　×確認できない

OUR ACTIVITY (2012.7-)

住民意識調査と景観資源マップの作成

住民のみを対象にしたWSや他の地域に住む人を交えたWSを行い、伊庭に住む人の意識や外部から見た伊庭の魅力を抽出した。また、かつては一軒に一艘存在し、農作業や漁労へ出向く際の移動手段として利用されていた田舟の遡上光景を再現することで、景観資源の可視化を試みた。各WSで景観資源マップを作成し、これらの活動から伊庭に潜む課題を「水路の活用」、「カワトの趣を大切にする」、「古い石垣を残す」、「歴史を伝える」に大別し、整理した。



伊庭八景の選定

発掘した景観資源の中から住民の思いが強いもの、思い出や将来像といった物語が豊富なものを選び伊庭八景の候補地とし、住民投票で伊庭八景を選んでもらった。さらに八景候補地の中から具体的な修景や将来像が描ける場所(「わたしの選ぶ未来の一景」)をWSで議論し、投票で選ばれた八景と「わたしの選ぶ一景」で決選投票を行い、最終的な伊庭八景を選定した。

今の八景　今のままですばらしいところ／残していきたいところ
未来の八景　少し手を加えればすばらしいところ／これから良くしていきたいところ

重点整備地区の選定

住民による自主的な保全・修景活動の意思がワークショップの中で読み取れ、かつ、住民の重視する歴史的価値のある場所または個人の思い出や記憶とともにその風景が語られる場所をマッピングした。回遊ルートはなるべく水路沿いを通り、修景エリアをめぐれるような道を選定した。

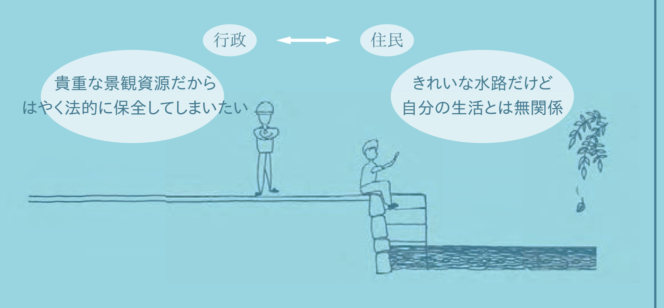
石垣・カワト調査

水路を構成する護岸とカワトの調査を行った。護岸は石垣・鉄・擬岩・コンクリート・土・ブロック石で分類、カワトは石・金属・コンクリートで分類した。調査の結果を右図にプロットしている。多くの石垣が存在する一方で、コンクリートや金属に変わってしまっている箇所が目立つ。残存する数少ない石製のカワトは大部分が崩れていた。道路沿いではコンクリートや金属製のものが特に多く見られ、カワト自体が住民に使われている様子は見られなかった。

PROBLEM

1. 生活利用の伴わない文化的景観

生活との深い関わりがあるからこそ、文化的景観は守られ、後世に伝えていくことができる。
生活利用の減少した伊庭の水路は本来の意味での文化的景観とは言えず、東近江市が重要文化的景観の選定を目指す中、現代の生活様式に合った新たな水路の利用を形成する必要がある。



文化的景観とは：「地域における人々の生活又は生業及び当該地域の風土により形成された景観地でわが国民の生活又は生業の理解のため欠くことのできないもの」（文化財保護法第二条第1項第五号）

cf. 全国の重要文化的景観の現状

平成25年4月1日現在、全国で35件の重要文化的景観が選定されている。文化的景観は定義でも示されているように、人々の生活や生業と密接な関係を有しているべきものである。既に選定されているもののうち現在も生活や生業の一部が風景に現れているものがある一方で、風景を構成した過去の生活や生業が失われ、過去の遺物と化している風景も少なくはなく、本来の文化的景観とは言えなくなっている。

2. まちづくりへの住民参加の偏り

現在までの活動で、チラシやニューズレターの配布といった広報活動にも力を入れてきたが、WSや伊庭八景の住民投票への参加者の多くが高齢者であり、若者の参加が少なかった。参加者にも偏りがあり、伊庭の景観保全に興味のある一部の活発な方々は毎回来てくださっていたが、参加者の増加はあまり見られなかった。また、東近江市が主催した風景サロンへの参加者もその多くが高齢者であり、今後の伊庭の重要文化的景観の選定や景観まちづくりを進める上では参加者の偏りを解消することが重要な課題である。

原因
・水遊びをする子どもの減少による原風景の変容
・水路の利用が減少したことによる水路に対する愛着や思い出の喪失
・水路の存在を当たり前だと感じている住民の意識
・公共空間である水路の利用が減少したことに伴う協助精神の低下

CONCEPT

セミパブリックライフ
～水路と親しい新たなライフスタイルの形成～

場所のデザイン

公共空間の私的利用を促す修景デザイン

現代生活になじむ水路空間とし、利用を促進

公共空間に対する美意識を高め、住民による自主的な管理を促す

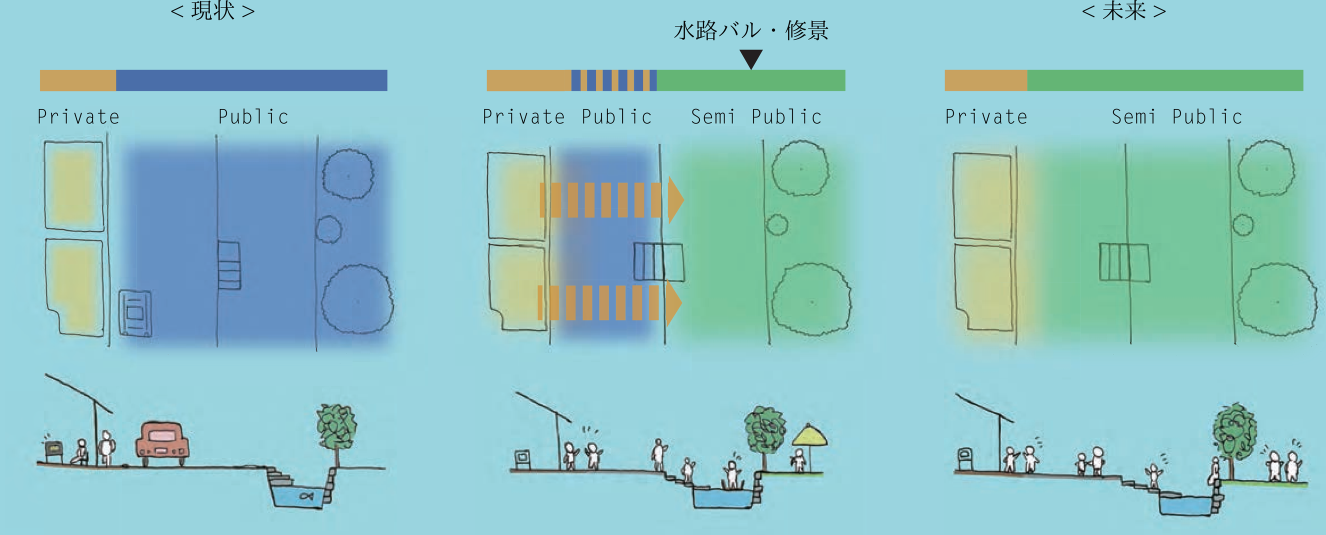
参加のデザイン

水路の利用法を住民に示す『水路バル』の開催

水路の新たな利用法を住民に示し、日常生活への定着

既存組織を中心に据え、地域内の多世代間交流を促進

DIAGRAM



水路は日常生活から離れたパブリックな空間。自分の使う場所ではないため多くの住民は無関心であり、その保全に責任を持つこともない。

修景とバルによって水路を中心とした新たなライフスタイルを提案。水路は多世代にとってのセミパブリック空間へ。私的空間は拡大し、まちなかへ滲み出す。

まち全体がセミパブリック空間となる。住民は地域への愛着を持ち、景観資源保全の意識が生まれる。生活とともにある文化的景観としての真の価値を創出。

人と水路のまち・伊庭の新しいライフスタイル：ある休日を例に

8:00　カワトにあるポストから朝刊を取って、ちょうど出てきた近所の人にもあいさつ。

10:00　水路の水でお花に水やり。休みの日はお父さんもお手伝い。

12:00　カワトに座ってみんなでランチ。水を眺めながら食べると気持ちいい。

14:00　お昼ごはんのあとは水路横を親子で散歩。謹節館広場で遊ぶ子と友達に。

16:00　お年寄りも気軽に立ち寄れる広場のカフェ。気心知れた仲間と外でおしゃべり。

18:00　晩ごはんまでは遊びの時間。魚をとったり、水かけっこしたり。

20:00　汚れたくつを水路で洗うのは子どもの仕事。夜のカワトは隠れ家みたいでワクワク。

22:00　水路床を出したら近所の人と集まって乾杯。一日の疲れは水に流しましょう。

新ライフスタイル定着に向けて 1　修景デザインの提案　―セミパブリックな空間として、「私」が使う水路へ。

多世代の人々が集まる、みんなの居間
▶謹節館広場

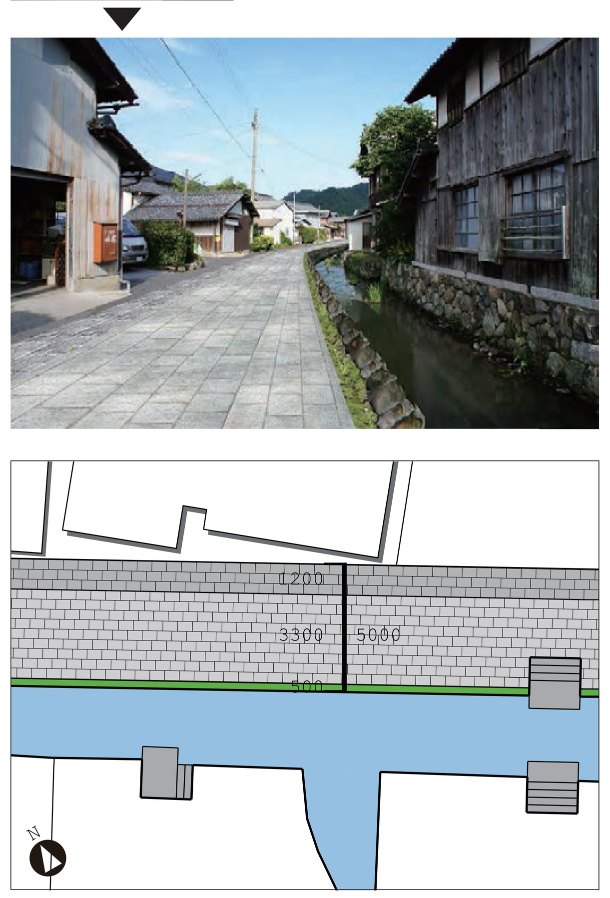
伊庭の中心に位置する謹節館の周辺を芝生の広がる空間にすることで、住民たちにとっての憩いの広場が形成される。また、水路に近い場所には大きな親水空間を設け、子どもたちが水路を身近なものとして触れられる場を提供する。このように、さまざまな世代の住民が集まれる交流の場として機能することが期待される。

・伊庭城址の石垣復元
・橋の撤去と親水階段の設置
・芝生の養生
・石畳の敷設

だれもがまちを楽しむ、縁側としての遊歩空間
▶石畳の道

車道の舗装を石畳とし、歩行者優先の意識を生む。安心・安全度が高まることで、子どもからお年寄りまで水路を眺めながら散歩や休憩ができる空間となる。伊庭ではかつて、家の前の水路沿いに出てお酒を飲んでいたという。単なる歩行のみならず、飲みニケーションや祭り、稽古事といった様々なイベントが発生する場所となるだろう。

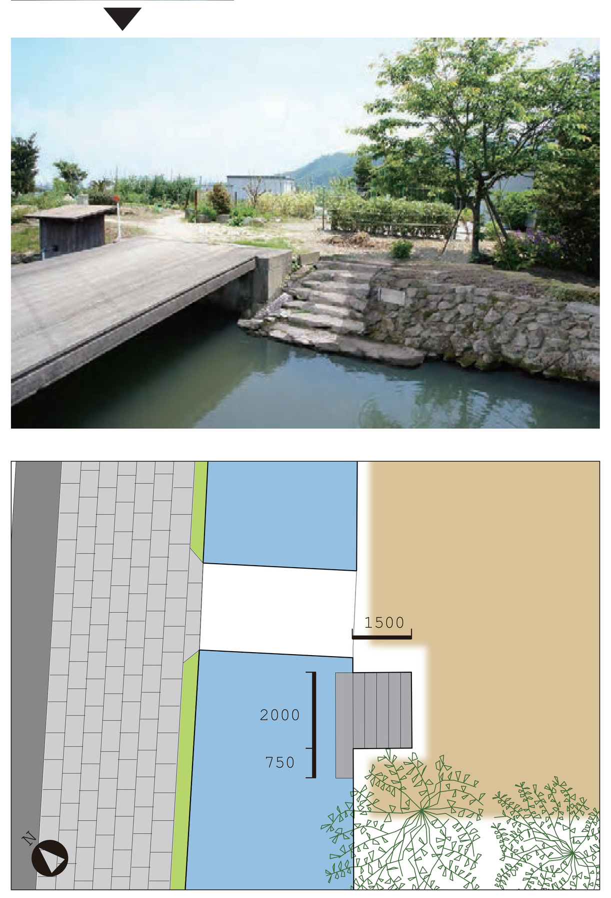
・石垣復元
・石畳の敷設
・ガードレールの撤去



郵便受けが住まいと水路との距離を縮める
▶カワトポスト

カワトにポストを設けることで、住民たちの1日はカワトで水路を眺めることからスタートする。水路に気軽に出ることが出来るだけでなく、水汲みや簡単な洗い物をする空間としても使用することが出来るため、まさに生活景が現れる場である。住民たちの日常生活と水路を繋ぐ役割を果たすことが期待される。

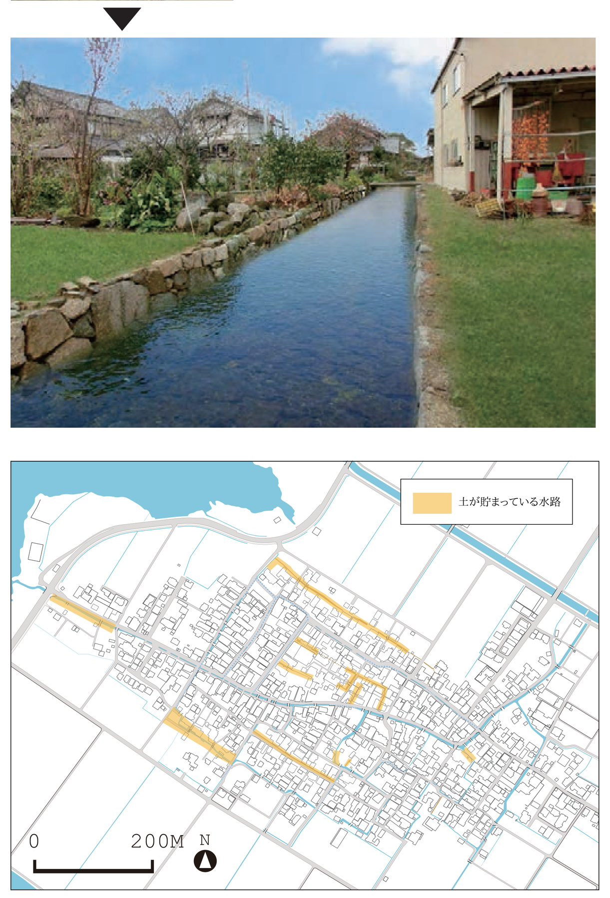
・石造のカワトを復元
・水路上の床面積増
・郵便受けの設置



住民の求める「私の空間」が形に現れる
▶水路の復活

土が溜まって狭くなっている水路や完全に埋もれている水路を、住民自身が掘って復活させる。住民の意向を反映した水路デザインとなることで、その後の利用継続や維持管理が期待される。また、デザイン過程での住民WS等で、水路の新しい利用法が提案される可能性もあるため、さらなる空間利用を見込めるだろう。

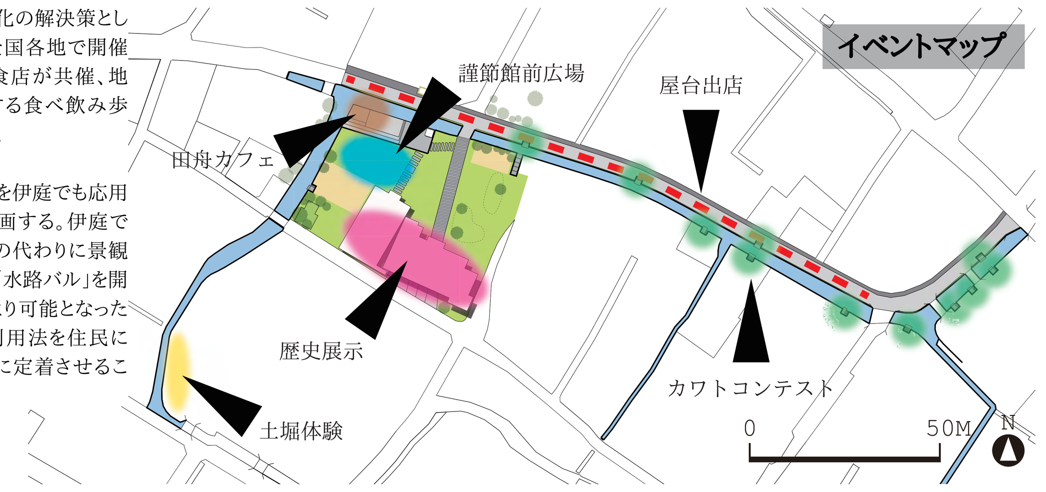
・石垣の積み直し
・スコップでの掘削作業
※水路バルのイベントとして作業を開始



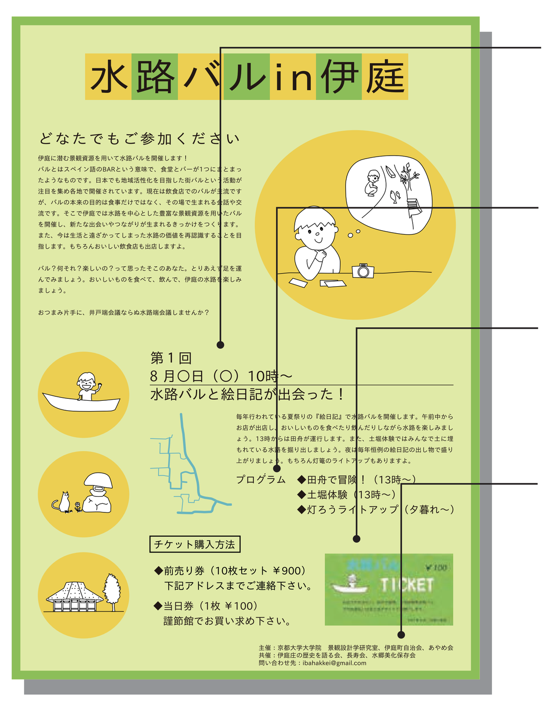
新ライフスタイル定着に向けて 2　水路バルの開催　―まちなかにある空間の私的利用可能性を共有する。

近年、地域活性化の解決策として「街バル」が全国各地で開催されている。飲食店が共催、地域交流を創出する食べ飲み歩きイベントである。

街バルの考え方を伊庭でも応用し、イベントを企画する。伊庭では、お酒や料理の代わりに景観資源を提供する「水路バル」を開催する。修景により可能となった新たな水路の利用法を住民に示し、日常生活に定着させることを目指す。



住民に配布するチラシ（全戸配布。さらに小学校での配布を依頼。）



開催日

「あやめ会」による定例行事『絵日記』と呼ばれる夏祭りと同時開催。地域の方の負担を増やすことなく、イベント参加者の確保が可能。

プログラム

昨年我々が地域の方と主催した田舟のイベントをプログラムの一つに組み込み、地域資源を活かした祭りとして継続を狙う。

バルチケット

田舟に乗るのに1枚、カフェの飲物に1枚など、水路バルで使えるチケットを販売。チラシにも1枚つけておき、参加しやすいように工夫する。

運営主体

住民主体の持続可能なイベントとするために、既存の住民組織の協力を仰ぐ。伊庭には多くの住民組織があるが、それらの活動は個別に行われ、連携が不十分である。多くの組織は高齢者中心であるため、中学生から50代まで幅広い住民が参加している「あやめ会」を中心に据え、多世代間の交流を生む。

私有物をまちの資源として開く
カワトコンテスト

カワトポストは個人の持ち物であるが、水路一体をセミ・パブリック空間として誰でも近づきやすい場所にするため、「カワトコンテスト」を企画する。住民が自分のカワトを花や植栽で飾り付け、水路バルを訪れた人に投票を行ってもらう。投票用紙は各カワトのポストに投函し、バル終了後に住民が受け取る。

居間としての公共空間
謹節館広場と田舟カフェ

田舟と謹節館前の広場とで一体的な喫茶空間をつくる。座席は舟上でも広場でもよい。田舟に乗っている人の姿や謹節館で行われる活動といった「水路を中心に人々が集う」風景が現れる。謹節館周辺は公共空間を自分の家のようにくつろげる場所となる。

まちの魅力づくりに参加する
土堀体験

若者が集まる伊庭バルにおいて土堀体験を行い、多くの人に少しずつ土を掘ってもらうこととする。毎年行う毎に土が取り除かれていく水路を見ることで、住民がまちづくりに参加していることを自覚してもらうことができる。また、土堀体験をきっかけに住民活動が活発になることも期待できる。

歩行者天国化し、屋台を出店

謹節館で歴史展示。「伊庭庄の歴史を語る会」、「長寿会」の方に伊庭の歴史や思い出を子供に伝えてもらい、伊庭の歴史を後世に継承